



## ワークショップ「主語を巡って」

福田 稔 (宮崎公立大学)  
北峯裕士 (北九州市立大学)  
古川武史 (福岡工業大学)

### 概 略

Chomsky (1993)が提唱し発展させているミニマリスト・プログラムの中で、近年Rizzi (1997)は談話に関わる概念を節の構造と関係付けて、節の左周辺部(Left Periphery)の詳細な構造分析(Cartographic Approach)を提唱している。本ワークショップでは、左周辺部や移動と主語に関わる3つのトピックを検討し、主語の統語的特異性を多角的に分析することで、その要因を明らかにすることを目的とする。

福田は名詞句における属格主語の統語位置に関する分析を、北峯は主語からの抜き出しと目的語からの抜き出しの差異の分析を、古川は文が主語として機能する構文の統語分析を行う。

ワークショップは、初めに福田が概略を述べ、北峯、古川、福田の順で発表し、質問やコメントを受け、福田が最後に総括する。

### 発 表 要 旨

#### ① 主語と目的語からの移動について

北峯裕士

本発表では、名詞句からの抽出における(1)や(2)のような動詞の違いによる文法性の差、さらには主語名詞句と目的語名詞句からの抽出可能性の差(3)を考察していく。

- (1) a. Who did you write/??read those essays about?  
b. Who did you write/read essays about?
- (2) a. Who did you tell/\*hear those jokes about?  
b. Who did you tell/hear jokes about?
- (3) a. Who is the class reading a book about?  
b. \* Who is a book about being read by the class?

一般的に、上の(1b)や(2b)のように不定名詞句からの抽出は可能であると考えられており、一方、定名詞句からの抽出はできないとされている。しかし、(1a)や(2a)が示しているように、定名詞句からの抽出に関して、どの動詞の補部になるかによって、文法性の違いが生じている。

Davies and Dubinsky (2003)では、名詞句を3種類に分け、なぜ定性条件に関して(1a)や(2a)のような違いが出るのかを、抽象的なNP-Incorporationを提案することにより説明している。彼らによると、DPは、NPとは異なり、wh移動の障壁となることを仮定し、動詞の補部DPがその主要部である動詞に編入(incorporate)されるかどうかによって、DPの障壁性がなくなるとしている。たとえば、(2a)の場合、補部のDPであるthose jokes about whがtellに組み入れられ、そのDPの障壁性がなくなり、一方、hearでは、DPが組み込まれずに障壁のままであると述べている。

彼らは、このようにDPがwh移動の障壁になるということを前提に、動詞の補部がその動詞へ編入されるかどうかにより、上の(1)や(2)の違いを説明する。彼らは、さらに、(3a)と(3b)のような抽出の違いについて、主要部TにD素性があるため、主語の範疇(節・前置詞句・名詞句など)に関わらずDP接点に支配されているとし、主語からの抽出は、wh移動に対するDPという障壁が存在するので、(3a)と(3b)の文法性の差が出ていると述べている。

しかし、主語からの抽出が必ずしも不可能であるというわけではない。

- (4) a. \* Who did pictures of arrive?  
b. ? About which war was a book sold?  
c. ? On which topic was a lecture given?  
d. ? Of what senator was a picture taken?

Johnson (1985)では、(4a)よりも(4b, c, d)は容認性がかなり高いと指摘されている。このように、主語からの抽出はDavies and Dubinsky (2003)が言うように全て不可能であるということではない。そこで、本発表では目的語の名詞句からの抽出を踏まえた上で、主語からの抽出を説明する分析を提案する。

文主語を巡っては、DP主語との比較を通して様々な分析がある。例えば、Koster (1978)とAlrenga (2005)は、文主語はtopic位置に基底生成されたTopic Phraseとし、空演算子Opを介し元位置と関連づける分析を提案している。

- (1) [<sub>CP</sub> topic<sub>i</sub> [<sub>CP</sub> Op<sub>i</sub> [<sub>TP</sub> t<sub>i</sub> . . . ]]]

これは文主語の振る舞いがDP主語よりもむしろtopicの振る舞い近いためそのような分析が採られている。

Topic要素が文頭に生じている場合、疑問文にすることができない(2a)が、それと同様に文主語の場合も疑問文にすることはできない(2b)。

- (2) a. \* Did the book, Mary gav~~e~~ to John?  
 b. \* Did [that John showed up] please you?  
 c. Did it please you that John showed up?

Topic要素は2つ文頭に生起できないが、文主語の場合も、topic要素が文頭に生起することはできないなどの事実に着目した分析である。

- (3) a. \* John<sub>j</sub>, [that the Giants lost the World Series] shouldn't have bothered t<sub>j</sub>.  
 b. \* John<sub>j</sub>, the book<sub>i</sub> I gave t<sub>i</sub> to t<sub>j</sub>.

上記のTopic位置に基底生成されるとする分析とは異なり、Stowell (1981)は、文は格を付与されないということを規定したCase Resistance Principleの帰結として、文主語は、主語位置から直接移動によりTopic位置へと移動したとする分析を提案している。

- (4) [<sub>CP</sub> topic<sub>i</sub> [<sub>TP</sub> t<sub>i</sub> . . . ]]

一方で、文主語をTopic位置に生じているというように特別扱いをせずに、DP主語と同様に主語位置に生起しているとする分析がある。その根拠であるが、まず英語の主語位置にはDPやCP以外の要素も生じる。

- (5) a. [<sub>CP</sub> That Shelby lost it] is true.  
 b. [<sub>PP</sub> Under the bed] is a good place to hide.  
 c. [<sub>AP</sub> Very tall] is just how he likes his bodyguards.

これらの主語はDP主語の場合と同じように受け身や繰り上げの適用を受ける。

- (6) a. [<sub>CP</sub> That Shelby lost it]<sub>i</sub> appears [t<sub>i</sub> to be true].  
 b. [<sub>PP</sub> Under the bed]<sub>i</sub> appears [t<sub>i</sub> to be a good place to hide].  
 c. [<sub>AP</sub> Very tall]<sub>i</sub> appears [t<sub>i</sub> to be just how he likes his bodyguards].  
 (7) a. \* It/There appears [<sub>CP</sub> that Shelby lost it] to be true]  
 b. \* It/There appears [<sub>PP</sub> under the bed] to be a good place to hide]  
 c. \* It/There appears [<sub>AP</sub> very tall]<sub>i</sub> to be just how he likes his bodyguards]

DP主語の場合と同様に、主語位置に生じる要素と動詞の間には数の一致が観察される。

- (8) [<sub>CP</sub> [<sub>CP</sub> That the march should go ahead] and<sub>CP</sub> [that it should be cancelled]]] have been argued by the same people at different times.  
 (9) a. Sandy talks a lot about her beach house and the family's Appalachian camping trips. As a result, <sub>PP</sub>[ [<sub>PP</sub> along the coast] and <sub>PP</sub>[ in the mountains]] remind me of Sandy's retirement fantasies.  
 b. [<sub>PP</sub> [<sub>PP</sub> Under the bed] and [<sub>PP</sub> in the fireplace]] are not the best (combination of) places to leave your ~~tv~~.

- (10) [<sub>AP</sub> [<sub>AP</sub> Very brawny] and [<sub>AP</sub> very studious]] are what Cindy aspires to be.

Davies and Dubinsky (2001)はこのようなDPとの平行性を元にDP以外の範疇が主語に生じる場合、これらの要素はみなDP-shell構造のnull Dの補部に生じているとする分析を提案している。

- (11) a. [<sub>DP</sub> [<sub>D</sub> φ] [<sub>CP</sub> That Shelby lost it]] is true.  
 b. [<sub>DP</sub> [<sub>D</sub> φ] [<sub>PP</sub> Under the bed]] is a good place to hide.  
 c. [<sub>DP</sub> [<sub>D</sub> φ] [<sub>AP</sub> Very tall]] is just how he likes his bodyguards.

本発表では、これらの文主語を巡る提案を最近のミニマリスト・プログラムやRizzi (1997)の左周辺部の構造分析の枠組みで比較検討し、より妥当な分析を提案する。

## 1. はじめに

英語では、DP 内部に属格要素は1つしか生じないが、意味上は大きく2つに分類できる。(1a)のように修飾する名詞と何らかの意味的な関係を持つ場合と、(1b)のように、所有を意味する場合である。Takano (1990)に従って、これら2種類の属格要素を「属格主語」と呼ぶことにする。

- (1) a. *the enemy's* destruction of the city  
b. *John's* cat

2種類の属格主語には上記の違いに加えて、例えば、wh 移動に関する違い(2)や rationale clause の認可の違い(3)などがある。

- (2) a. ?? *What* did you sell Mary's picture of *t*? ( "the picture Mary took" )  
b. \* *What* did you sell Mary's picture of *t*? ( "the picture Mary possessed" )  
(3) a. *John's* speeches *PRO* to win the election  
b. \* *John's* cat *PRO* to anger his aunt

## 2. これまでの分析

(1a)と(1b)のDP内部の属格主語を全て付加詞として分析する提案がある(Zubizarreta (1985), Grimshaw (1986))が、この分析では(2)と(3)の(a)と(b)の違いを体系的に説明できない。これに対して、(1a)と(1b)の属格主語は統語的に異なるという分析がある(Stowell (1989), Takano (1990))。具体的には、Takano (1990)はDP内部にIPがあると提案し、次の構造を仮定して上記の(a)文と(b)文の違いを説明している。

- (4) a. Chomsky's lecture  
"the lecture Chomsky delivered"  
b. [<sub>DP</sub> [<sub>IP</sub> [<sub>DP</sub> Chomsky] I [<sub>NP</sub> lecture]]]  
(5) a. yesterday's lecture  
"the lecture scheduled for yesterday"  
b. [<sub>DP</sub> [<sub>IP</sub> [<sub>PP</sub> e [<sub>DP</sub> yesterday]] [<sub>IP</sub> t I [<sub>NP</sub> lecture]]]

(5b)でPPがTopic Islandに似た構造を形成するのでwh移動で飛び越すと、(1b)のように文法性が著しく下がる。また、(5b)では、属格主語が rationale clause のPROをC統御できないので(3b)のように非文法的になる。

しかし本発表では、Takano (1990)の提案には、DP内のEmpty PPの言語獲得の問題、DP内部でのEmpty PP移動の問題、yesterday's lectureに"the lecture someone delivered yesterday"の解釈があることを説明できないという問題があることを指摘し、受け入れがたい分析であると論じる。

## 3. 提案

節構造(6)と同じように、名詞句構造も大きく3つの層に分類できるというAboh et al. (2010)の提案(6)を受けて上述の事実を説明する。

- (6) [<sub>[Discourse-linked features]</sub>... [<sub>[inflectional/agreement features]</sub>... [<sub>[core predicate and its arguments]</sub>... ]]]

具体的には、(6)をDP分析に適用して(7)の構造を仮定する。

- (7) a. [<sub>[outer domain]</sub>... [<sub>[agreement domain]</sub> [Chomsky's]<sub>i</sub> [<sub>[thematic domain]</sub>... t<sub>i</sub>... ]]]  
b. [<sub>[outer domain]</sub> [[yesterday]'s] [<sub>[agreement domain]</sub>... [<sub>[thematic domain]</sub>... ]]]

(4a)の属格主語はTakano (1990)と同じく、DPの照合領域にあると仮定する。さらに、本発表では、この属格主語に付加している'sは発音時に具現化されるので、属格主語が rationale clause をC統御する際には障害とならないと論じる。

一方、(5a)の属格主語はTakano (1990)と異なり、DPの照合領域より上位の領域にあると仮定する。これによって、文脈や談話の影響を受けて様々な意味解釈が可能となる事実を説明する。また、属格'sは主要部として範疇を成すので、属格主語が rationale clause をC統御する際には障害となる。これらの仮説から(2)と(3)における(a)と(b)の差異が生じることになる。また、Takano (1990)の提案で問題となった3つの事実も解決できると論じる。

手紙は仕掛ける—*Doctor Martino and Other Stories* を巡って

甲南大学非常勤講師 沖野泰子

手渡しされる手紙から郵便制度に則って届けられるものまで、Faulkner は作品中にしばしば手紙を登場させる。書簡そのものが登場する場合もあれば、語り手がメッセージの内容を語ってみせる場合もあり、その描き方は様々である。初期の長編 *Soldier's Pay* において、すでに手紙が何通も登場しており、さらに *Light in August, Absalom! Absalom!* といった代表的な長編の中でも手紙は重要な役割を担う。Faulkner 自身がかつて郵便局に勤めた経験があるということも、その想像力に影響を与えているかもしれない。

そして後期の実験的長編 *Requiem for a Nun* において、手紙だけでなく、郵便制度そのものまでが物語において重要な役割を担うのである。郵便制度によって届けられる手紙は、この作品だけでなく Faulkner の物語世界では、しばしば問題を引き起こす原因になっている。郵便制度を連邦政府の象徴と捉え、郵便網の発達を連邦政府支配の広がりとして捉えたとき、*Requiem for a Nun* において、郵便制度と手紙によって引き起こされる厄介ごとは、連邦と南部の相克を、ひいては社会と個の相克を表すと読むことができるのである。

さて、今回の発表では以上の流れを念頭においた上で、1934年に発表された短編集 *Doctor Martino and Other Stories* の中から、“Doctor Martino,” “There was a Queen,” “Black Music,” “Honor”の4編について、手紙の機能の視点から「名誉」と「メッセージ」をキーワードに読み解いていきたい。この4編は物語の舞台も登場人物も全く異なり、何のつながりもない。だが、個の名誉を守るために葛藤する人々を描き出し、そこに何らかの形で手紙、あるいはメッセージが絡んでくるという構成が共通している。短編集の最初に登場する“Doctor”は、少女 Louise の成長とそれを見守る老医師 Martino、さらに Louise の結婚に至るいきさつを婚約者 Jarrod の視点から描いた物語である。手紙に関する記述に多くが割かれるわけではないが、描かれている手紙のやりとりが様々なものを象徴し重要な役割を果たしている。また、“There”において手紙は登場人物の女性たちに深刻な問題をもたらすが、そこには連邦政府の役人が関係しており、南部の誇りや自らの矜持を守ろうと葛藤する女性たちが描かれ、南部と連邦の相克を想起させる。これはのちの *Requiem* に見られるテーマに繋がる作品と考えることができる。“Black”は酔った勢いで仕でかしたできごとのために以前の生活に戻るに返れなくなった男が、自分の存在を妻にだけは知らせようとして新聞に投書し、さらにはその切抜きを妻に送ったいきさつが語られる一風変わった物語である。ただ、男からのメッセージはうまく妻に届いたのかどうか不確かで、郵便制度の不備を批判的に描いた作品と言える。そして“Honor”では、相棒 Howard の妻との不倫関係を清算し、自らの「名誉」を守った語り手 Monaghan に、自身が Howard 夫婦の息子の名付け親であることを知らせる手紙が届く。居場所を転々とする Monaghan に半年かけて追いついた手紙は、郵便制度が優れた制度であると同時に、どこか間の抜けたものであるという印象を読者に抱かせる。

これらの物語はメッセージや郵便制度というしかけ（文学的意匠）を通して、緩やかにつながり響きあっているが、そこで扱われた問題点がのちの長編小説の中でさらに深められていくと考えられる。手紙にみられる Faulkner の想像力を考える際の通過点としてこの短編集を捉えることが可能であろう。

“My autobiography” —1915年、ロレンスの手紙と短編について—

甲南大学非常勤講師 横山三鶴

『ケンブリッジ版 D・H・ロレンス書簡集』(Cambridge Edition of the Letters of D. H. Lawrence) は1979年に最初の巻が出版され、1993年までに7巻、2000年に未所収のものを新たに集めた第8巻が出版され、そこには全5683通の手紙が収められている。

手紙とはきわめて個人的なもので、書き手はそれが第三者に読まれることになるうとは、ロレンスのような作家といえども想定していなかったであろう。作家の手紙は、作家や作品を理解する上での重要な資料となることは言うまでもないが、このケンブリッジ版のロレンスの書簡集を年代順に読んでいくと、それがある種の日記であり、エッセイであり、「自伝」でもあることに気づく。しかも、自己の経験を客観視してフィクション化するまでの時間の経過を待たずに言語化された、彼自身の生々しい自己の記録なのだ。

『書簡集』に収められている最初の手紙は、1901年9月頃、事務員募集の広告に応募した時のもので、高校を卒業したばかりの16歳の若者らしい初々しさが感じられる。当然、年ごとに手紙の内容も宛先の人物も変化するのだが、宛先の人物に注目していくと特に彼の関心の移り変わりがよくわかる。若き日のロレンスはひたすら若い同年代の女性に膨大な量の手紙を送り続けるが、次第に、教師時代の同僚、出版関係者、作家、批評家など、交友関係の幅も視野も広がっていく。「誰に手紙を書くか」は、作家として成長するロレンスが重要視する対象の変遷と思考の変化を反映している。

そこで、今回の発表では、1915年という年に焦点を絞って、30歳を迎えたその年、ロレンスが誰に何を伝えようとしたのかを検証し、手紙を通して見えてくる大きな社会の変動、それが個人の内面に与えた影響、そしてロレンスが作家としてそれをどのように作品に昇華させようとしたのかを考察する。1914年に勃発した第一次世界大戦は否応なしに多くの人の生き方を変えた。アメリカの詩人ハリエット・モンローに宛てた11月17日付けの手紙でロレンスは、「戦争は恐ろしいものです。戦争をとことん追跡していった個人の戦士たちの故郷、その心にまで触れることが芸術家の仕事なのです」と記しているが、15年に入って戦争がますます激化する中、彼は作家として何ができるかを問い続けたに違いない。もはや個人宛ての手紙のレベルを超えたリアリティがそこには溢れているのである。

『書簡集』に収められた15年の手紙は294通、宛先は48人に及ぶが、今回は当時深い関わりを持っていたレディ・シンシア・アスキス、レディ・オットリン・モレル、バートランド・ラッセルに特に注目したい。そしてこの年に執筆された‘The Thimble’と‘England, My England’の2編の短編は、その3人に宛てた95通に及ぶ手紙から光をあててみると、当時のロレンスがいかに戦争に対して揺れ動く矛盾した感情を抱いていたかを反映し、作家として戦争をどう描くべきかを模索していた過程において重要な位置にあるということが理解できる。そこには、その後ロレンスが追求し続けた「人はいかにして再生できるか」というテーマの原点がある。

## 湖水地方の詩学

甲南大学文学部 中島俊郎

18世紀中葉、詩人トマス・グレイがかつてアルプスで強く刻印された美意識をここ湖水地方で追体験して以来、湖水地方は、文学を涵養する地として人口に膾炙しはじめた。さらに19世紀初頭にワーズワス、コールリッジ、サウジーなど一群の詩人たちが当地に移り住み、これらの「湖水詩人」たちが数々の名詩を生み出したことは、今日では文学史的な事実になっている。その系譜はベアトリックス・ポッター、アーサー・ランサムなどの児童文学までたどっていくことができ、新たに環境と文学というきわめて先鋭的なテーマをつきつけている。

湖水地方を文化変容の対象としてみると、変節点はヴィクトリア朝時代に起きたと考えて異論はなかろう。この時代になって、湖水地方は、たんに美意識を投影するだけでなく、文化・時代精神そのものを映しだす鏡となったからである。ワーズワスやラスキンが反対の声をあげたにもかかわらず、鉄道が敷設され、ツーリズムが到来し、聖なる地の様相を一変させてしまった。自然の大聖堂から遊技場へと変貌をとげていったのである。

鉄道によるツーリズムがかまびすしくなればなるほど、逆に湖水地方をめぐる文学的精神は静謐なものを求めだし、とりわけワーズワスの詩歌を規範と仰ぎだすようになった。ヴィクトリア朝にあまた出版されたガイドブックは、ほとんどがワーズワスの詩を歌枕とした案内を載せて、この地に旅人を誘ったのであった。ワーズワス自身、押し寄せるツーリストの襲来を嫌悪し、ガイドブックの出版にさえためらいを覚えていたのに、みずからがツーリズムの中心にかつぎだされてしまったのは皮肉といえれば皮肉であった。

こうした湖水地方詣では、すでに起きつつあった文学巡礼という、ツーリズム形成にも大きく寄与し、旅行と文学鑑賞という、いわば反発し合うような要素が盛り込まれた文学的ツーリズムの波を生起させていく。そのブームの支柱となったのもワーズワスの詩であった。ワーズワスは環境がもたらす自然の精神性を重視したが、その詩的影響力が頂点をきわめ、宗教家、哲学者、文学者や政治家のみならず一般人にまで波及していったのは、ほかならないヴィクトリア朝時代であった。

本発表では、ワーズワスの詩作品がヴィクトリア朝時代に、どのように聖典化されていったのかという過程に省察を加え、同時代に発行されたガイドブックを用いて、「文学とツーリズムの関係」を論究してみたい。